

踏まね踏まれても生き返る

NO.4 2024.5.18

いたばし雑草通信

編集：発行 木村松夫

090-8646-9757

matsuokimura@gmail.com

メール発信のみの情報紙です。無料購読希望の方はメールでお申込みください。PDFでお送りします。

クサイの花 蜜を吸いに来る虫 イグサ科

「クサイ」と言っても「臭い」ではなく、畳表(たたみおもて)やゴザに使われる藨(「い」または藨草「いぐさ」ともいう)に似ているが、葉があるので「草の藨」と昔の人は観たのでしょう。だったら草藨草とすればよいのだけれど、そうなるとほんとに「臭い草」になってしまうので、やっぱり「クサイ」と呼ぶのが適当なのかも。

足元に生えていて人が踏みつけてもまた生えてくる強い草です。真ん中の花らしきものを包んでいる

6つの星形に広がる苞葉は直径8mmぐらい。花らしきものはよく見れば雄蕊と雌蕊。1~2mmぐらいの小さな花です。そこに、同じくらいの大さの虫(蟻=アリのようです)を発見! 蜜を吸いに来ていました。

こんなに小さくても、懸命に命を燃やし、その命から生きる力をもらっている動物がいるのです。

このようにマクロの視点から凝視すると、そのすごさが「美」として伝わってきます。



アメリカフウロ→

フウロソウ科

春の開花期が終わったらすぐに紅葉を始めました。

←ニワゼキショウ

アヤメ科

湿地を好むアヤメ科の植物には珍しく、乾いた土壌で生きる。



ヘラオオバコの花 オオバコ科

植物に詳しい先輩活動者と一緒に赤塚公園大門地区を歩いていて、この花を初観察。「すごい！このキク科！」と叫んだ瞬間に「違います！オオバコ科の、しかも外来種です！」と、切って捨てるような返答。確かに外来種の管理には気を付けなければならないことはあるのだけれど、だからと言って、存在そのものを否定するような扱いにはなじめないなあと思ったものです。

実際、花穂に花弁が付かない在来種のオオバコよりも華やかで、それなりの良さがあると思います。花穂の高さは4cmくらいで、下の方から咲き上がっていく花は直径2mmにも満たない極小型。

写真を撮るのには苦労しました。腰痛再発！



カラスビシャクの花 終りごろ 命(いのち)の動き サトイモ科

尾瀬ではミズバショウ、赤塚ではウラシマソウに代表されるサトイモ科の植物の特徴は雄蕊と雌蕊を包んでいる仏炎苞（ぶつえんぼう＝仏像の光背にある炎）とその先端から伸びる附属体で、その形によって種名が付けられています。でも、このカラスビシャクは有名なミズバショウとは比べ物にならないくらい小さくて地味。結構、あちこちで見られるのですが、ほとんど誰も気が付きません。でも、でも・・まちなかの乾燥した場所に咲くサトイモ科の植物は珍しいもので、しかも、昔から薬草として珍重されてきたのだから、捨てたもんじゃありません。

右の写真では附属体がしっかり立ち上がっていますが、盛りを過ぎると、左のように附属体はしおれています。でも、穂の下部に実が育っています。ここがいちばん大事な「命の元」なのでした。

